様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００３１１

研究課題名（和文）新出『夜半亭蕪村句集』の基礎的研究

研究課題名（英文）The Foundational Study of the Newly Discovered "Yahantei Buson Kushuu (Yahantei Buson's haiku Poetry Collection)"

研究代表者
清登　典子（KIYOTO, Noriko）

筑波大学・人文社会系（名誉教授）・名誉教授

研究者番号：６０１７７９５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では平成27（2015）年に原本が出現した、与謝蕪村の新出句集『夜半亭蕪村句集』収載句全1902句の1句ごとについての情報を集積したデータベースを作成し、科研成果となる論文とともにホームページ上で広く公開するとともに初句索引を付した研究成果報告書を作成して刊行した（非売品）。
また、上記の作業を通じて『夜半亭蕪村句集』が自選句集『蕪村自筆句帳』の選句元句集であることを具体的に明らかにし、そこから『蕪村自筆句帳』に存在する欠落箇所について、『夜半亭蕪村句集』の配列に基づいて復元の可能性を探り、全体で25箇所の欠落箇所のうち19箇所について復元案を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
与謝蕪村の新出句集『夜半亭蕪村句集』収載の1902句の1句1句について、蕪村の句会記録および他の蕪村関係句集類との対応関係などについての詳しい情報を集積したデータベースを構築し、新出句集の全体像を提示するとともに新出句集が蕪村晩年の自選句集『蕪村自筆句帳』の選句元となった句集であることを具体的に明らかにすることができた。さらに、作成したデータベースをホームページ上および印刷物として公開することで蕪村俳諧研究の今後の進展に寄与することを可能とした。

研究成果の概要（英文）： In this project, we created a database of all 1,902 haiku poems in "Yahantei Buson Kushuu" by Yosa Buson, the original copy of which was newly discovered in 2015. Our database is now available to the public on our website, as well as a journal article published as a report of our study. We also published a comprehensive research report with an index of shoku (the first 5 syllables of a haiku poem) in the collection (not for sale).
Our research specifically revealed that "Yahantei Buson Kushuu" is the source for the self-selected anthology of Buson, "Buson Jihitsu Kuchou (Handwritten Anthology of Buson's Poetry)." Based on this finding, we attempted to restore the missing sections of "Buson Jihitsu Kuchou" by examining the poems' sequence in "Yahantei Buson Kushuu" and successfully proposed restoration plans for 19 out of the 25 missing parts in "Buson Jihitsu Kuchou."

研究分野：日本近世文学

キーワード：与謝蕪村　俳諧　蕪村自筆句帳　夜半亭蕪村句集

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

与謝蕪村（1716～1783）の俳諧作品に関する本格的な研究は、明治 20 年代の正岡子規による蕪村発見と明治 31（1897〕年にはじまる子規一派による蕪村発句研究（のち『蕪村句集講義』として出版)から始まった。子規は俳句革新のための写生句の手本として蕪村発句を称揚したため、当時の蕪村像は近代的な写生俳人としてのものであった。やがて昭和に入ると、写生俳人としての蕪村像を否定して、「郷愁」の思いを持つ浪漫詩人として蕪村を捉えるべきだとする主張が萩原朔太郎『郷愁の詩人与謝蕪村』（昭和 11（1936）年）によって示されたが、朔太郎の蕪村理解も近代的詩人像を蕪村に重ねたものであり、大きく見て近代的な蕪村理解の枠組みを出るものではなかった。

こうした近代的蕪村像に根本的な疑義を提示し、近世俳諧の流れの中で俳人蕪村を捉えることの重要性を説いたのが、俳文学者である尾形仂であり、昭和 49（1974〕年に刊行した『蕪村自筆句帳』において、蕪村没後に稿本のままで残され、その後解体されて屏風や掛け軸等の形で頒布され各地に散逸していた蕪村晩年の自選句集に「蕪村自筆句帳」という仮の題号をつけた上で、散逸していたそれらの句稿断簡を集積し配列を推定することで復元することを試みた。また、そこに付された合点から、蕪村晩年の志向として「不用意」「高邁」「洒落」など江戸俳諧の流れを汲む要素のあったことを指摘した。以後現在までの蕪村研究は、この尾形の画期的業績を受けて江戸時代俳人としての蕪村のあり方を追求し句解釈を見直すことで進展してきた。平成 4（1992〕年に出版が開始された尾形仂監修『蕪村全集』（講談社）では、『蕪村自筆句帳』出版後の新たな句稿断簡発見による句集復元作業の成果（『蕪村自筆句帳』収載句として 1055 句を復元）が示され、さらに収載される全 2900 句弱の蕪村発句ほぼすべてについて作句年次の推定を行うなど、刊行時点での最新の蕪村俳諧研究の成果が取り入れられた決定版であり、これを大きく増補改訂する事態が出現することは予測できなかった。

しかし、平成 27（2015）年 10 月、『夜半亭蕪村句集』稿本の原本出現が新聞発表され、この新出句集中にこれまでに知られていない 212 句の蕪村の「新出句」が含まれていることが報告された。これにより蕪村の俳諧活動全体を見直し、その中に新出句集をどのように位置付けるのか、といった新たな問題が蕪村俳諧研究上に提起される状況となった。

２．研究の目的

本課題では、新出句集『夜半亭蕪村句集』の全体像を把握するための基礎作業として、稿本である『夜半亭蕪村句集』収載の全 1902 句（平成 27（2015）年 10 月の新聞発表においては 1903 句とされていたが、本研究での検討の結果 1902 句であることが判明）の一句一句についてのさまざまな情報を集積したデータベースの構築を第一の目的とすることとした。新出句集は平成 27（2015）年 10 月に発見が報告されたばかりであり、その全体像を具体的に把握することがまずは追求されるべきであると考えたからである。その上で、新出句集の編集意図や他の蕪村関係句集との関係の探求など蕪村の俳諧活動全体の中に新出句集を正しく位置付けるための研究が行われていくことが望ましいと考えた。さらに構築したデータベースの情報を広く公開することで、蕪村俳諧研究の活性化と進展とに寄与することを目指した。

３．研究の方法

（1）新出句集『夜半亭蕪村句集』のデータベース構築を進めて行くために、まず必要となったのがデータ項目の選定・配列・表示の仕方というデータベースの枠組みの作成であった。そこで研究代表者、研究分担者、研究協力者の全員が揃って出席する枠組み作りのための会議を何度か開催し、各自が持ち寄った素案に基づいて意見交換を行いデータベースの枠組みのおおよその案を決定した。その後、その枠組みに沿ってデータ収集を行っていくなかで、適宜必要なデータ項目、不要と思われるデータ項目についての意見交換を重ねることで枠組みの見直し作業を繰り返し行った。最終的には新出句集が他の蕪村句集類とどのような対応関係にあるかを明らかにすることを第一の目的とすることで方向性が定まり、そのために必要なデータ項目に絞ってデータの選定、配列、表示を行うこととした。選定されたデータ項目は以下の項目となり、これを収載句順の句番号（句集全体での句番号と四季部別の句番号の二つを付す）に続けて、表示することとした。①句頭書き入れ（文字による句頭の書き入れ)、②句頭符号（句頭に付された○、△、□等の符号)、③句形（収載句の最終的句形（書き入れによる修正後の句形)、④前書・後注、⑤講談社版『蕪村全集　第一巻発句』における発句番号（未収録の場合※を付す)、⑥蕪村一派句会記録四種（「夏より」「高徳院発句会」「月並発句帖」「耳たむし」」との対応関係、⑦他の蕪村句集類五種（『落日庵句集』『夜半叟句集』『蕪村自筆句帳』『蕪村句集』『蕪村遺稿』）との対応関係、⑧発句の修正情報、振り仮名情報、重複句等の注記、という 8 点の項目について、一句ごとのデータを収集し、データベースに加えていった。データの収集と書き入れについては、主に研究代表者が行い、点検作業に当たっては研究分担者を中心に他の研究協力者全員で作業を行った。

（2）新出句集『夜半亭蕪村句集』が蕪村晩年の自選句集である『蕪村自筆句帳』と深く関係する句集であることについては研究代表者が科研課題として取り組む以前からある程度の見通しを得ていたが、実際に上記のデータベース作成の作業を春部、夏部、秋部、冬部の順で進めていく中で、『蕪村自筆句帳』収載句がほぼその配列順に『夜半亭蕪村句集』中に収められていること等により、新出句集が『蕪村自筆句帳』の選句元資料となった句集であることを具体的に明確にすることができた。さらに新出句集中に存在する『蕪村句集』『蕪村遺稿』収載句については、本来であれば『蕪村自筆句帳』から選んだ句を類題別に編集し直した句集が『蕪村句集』であり、『蕪村句集』に選ばれずに遺った句を順番に並べた句集が『蕪村遺稿』である、という関係にあるので、当然ながら両句集の句はともに『蕪村自筆句帳』収載句であるはずなのだが、実際には『蕪村自筆句帳』中にある「欠落箇所」（句稿が未発見のために欠落している箇所）との関係から、『蕪村句集』『蕪村遺稿』収載句でありながら『蕪村自筆句帳』との対応関係が不明となっている句が並んでいる箇所が見られることに気づき、同箇所が『蕪村自筆句帳』の「欠落箇所」と対応するものであることを推定し、『夜半亭蕪村句集』における句配列から「春部」「夏部」「秋部」「冬部」それぞれにおける「欠落箇所」の復元案を提示した。

４．研究成果

（1）上記研究の方法（1）により、『夜半亭蕪村句集』収載全句の情報をまとめたデータベースを構築し、その成果を「春部」「夏部」「秋部」「冬部」という四部に分けてホームページ上で公開した。さらに全体を統一した上で初句索引を付し、「研究成果報告書　『夜半亭蕪村句集』発句対応一覧表」としてまとめ、令和 4（2022）年 3 月 15 日に刊行した（非売品）。

（2）上記研究の方法（2）により、『夜半亭蕪村句集』が『蕪村自筆句帳』として復元された蕪村晩年の自選句集の選句元となった句集であることを、『蕪村自筆句帳』に復元された全部で 81 の「句稿断簡」のそれぞれが『夜半亭蕪村句集』のどの部分と対応関係にあるかを可能な限り具体的に指摘することで明確に示した。さらに、『夜半亭蕪村句集』中に存在する「欠落箇所」全 25 箇所（従来は 24 箇所とされていたが本研究による検討の結果 25 箇所と判明）のうち 19 箇所について『夜半亭蕪村句集』の句配列に基づく復元案を提示した。以下、①「春部」、②「夏部」、③「秋部」、④「冬部」の各部についての研究成果を示す学術論文（または学会発表）とその成果の概略とを挙げる。

①『蕪村自筆句帳』復元の試みー春部欠落箇所の復元―（『文藝言語研究』77 巻、2020 年 3 月）
春部に含まれる 5 箇所の欠落箇所のうち 1 箇所について復元案を提示した。

②『蕪村自筆句帳』夏部欠落箇所復元の試み（『俳文学報』54 号、2020 年 10 月）
『蕪村自筆句帳』の選句元資料として『夜半亭蕪村句集』からの選句後に『夜半叟句集』が用いられていたことを明らかにした。その上で夏部に含まれる 7 箇所の欠落箇所の全てについて復元案を提示した。

③『『蕪村自筆句帳』秋部欠落箇所復元の試み（『ビブリア』155 号、2021 年 5 月）
『蕪村自筆句帳』秋部に含まれる 8 箇所の欠落箇所のうち 6 箇所について復元案を提示した。

④『蕪村自筆句帳』欠落箇所復元の試みー冬部欠落箇所の復元を中心にー（第 72 回俳文学会全国大会における口頭発表（オンライン開催）、2021 年 10 月）
『蕪村自筆句帳』冬部に含まれる 5 箇所（従来 4 箇所とされてきたが本研究による検討の結果 5 箇所と判明）の欠落箇所全てについて復元案を提示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 清登典子	４．巻 155
２．論文標題 『蕪村自筆句帳』秋部欠落箇所復元の試み	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ビブリア	６．最初と最後の頁 38-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清登典子	４．巻 54号
２．論文標題 『蕪村自筆句帳』夏部欠落箇所復元の試み	５．発行年 2020年
３．雑誌名 俳文学報	６．最初と最後の頁 26-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 深沢了子・深沢眞二	４．巻 17号
２．論文標題 宗因独吟「御鎮座の」百韻評釈	５．発行年 2020年
３．雑誌名 上方文芸研究	６．最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清登典子	４．巻 ７７
２．論文標題 『蕪村自筆句帳』復元の試みー春部欠落箇所の復元ー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文藝言語研究　文藝篇	６．最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 深沢了子・深沢眞二	4．巻 240
2．論文標題 俳諧における「謝霊運」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 アジア遊学	6．最初と最後の頁 200-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深沢了子・深沢眞二	4．巻 16
2．論文標題 宗因独吟「関は名のみ」百韻注釈	5．発行年 2019年
3．雑誌名 上方文藝研究	6．最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 牧　藍子	4．巻 28
2．論文標題 許六『追善註千句』翻刻と略注（二）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 成蹊大学人文研究	6．最初と最後の頁 99-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 清登典子	4．巻 150号
2．論文標題 『夜半亭蕪村句集』「重複句」の検討	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ビブリア	6．最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 清登典子	4．巻 70号
2．論文標題 蕪村「新出句」に見る遊興性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 俳文学研究	6．最初と最後の頁 11-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 清登典子
2．発表標題 『蕪村自筆句帳』欠落箇所復元の試みー冬部欠落箇所の復元を中心にー
3．学会等名 第72回俳文学会全国大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 深沢了子
2．発表標題 秋成と大坂俳壇
3．学会等名 シンポジウム「上田秋成の俳諧を考える」（招待講演）
4．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

科研費（平成30（2018）年度～令和3（2021）年度）基盤研究（C）「新出『夜半亭蕪村句集』の基礎的研究」研究成果公開ホームページ
https://buson-kaken-seika.jimdofree.com

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	深沢　了子 (FUKASAWA Noriko) (30350581)	聖心女子大学・現代教養学部・教授 (32631)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	金田〔大石）　房子 (KANATA Fusako)		
研究協力者	牧　藍子 (MAKI Aiko)		
研究協力者	真島　望 (MASHIMA Nozomu)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関